

## 青森県虚空蔵遺跡出土土器の共同研究

菊池徹夫・岡内三眞・高橋龍三郎

### はじめに

日本列島に髙様三足土器が存在する事実を最初に注意されたのは喜田貞吉氏であった。氏は、1927（昭和2）年の「奥羽北部の石器時代文化における古代シナ文化の影響について」（『民族』第2巻第2号）なる論文において青森県上北郡甲地村字蓼内黒志多（現、上北郡東北町黒洲田）での出土例について紹介し、「全然シナ古代の鬲を模したものに相違ないとの確信を得るに至った」として、内反刀子や玦状耳飾、あるいは玉斧などとともに、わが国が先秦時代の中国大陸から影響を受けたことを示す文物の1例と述べている。

この論文もまた資料も、残念ながら確証・傍証を得ぬこともあり、その後のいわば正統的な縄文土器型式・編年研究主流の風潮のなかで、さして評価されることなく経過した。

それからじつに半世紀以上の時を経て、1980年代に至って東津軽郡平館村今津遺跡、上北郡六ヶ所村富ノ沢遺跡と、相次いで縄文晩期の大洞式に伴って三足土器が発見されることになる。いずれも青森県埋蔵文化財センターの正式調査による出土であり、ことに今津例はポジの雲形文とネガの工字文からなる大洞C2式ないしは聖山式特有の文様をもち、型式編年上の位置が明確な例として研究者の注目をひいた。

しかし、それでも当然のことながら、研究者の間でもこれら縄文晩期の三足土器について、喜田のように中国大陸との関係を示すものと見る研究者ばかりではなかった。大陸の鬲と似ているのはたまたま安定のよい3足に作り出した偶然の結果であって、本来この器形は東北北部の縄文晩期文化のなかで独自に生み出されたもので、これは、いわば「他人の空似」に過ぎぬとする意見も相変わらず唱えられた。この地域の縄文晩期土器群の中に祖形は辿れるはずだ、というのである。

たしかに、東北地方の縄文晩期や北海道の恵山式期の土器群の中に、底部の4隅を突出気味に作り出す例が知られている。しかしそれは藍胎漆器でも知られるように、明らかに竈などの底部形態の模倣であって、それが仮に脚状に発展したとしても当然4足のはずである。また、



写真1 東北町黒洲田出土の三足土器

稀に縄文晩期の土器には中空袋状の2本の脚部をもつ例があるが、それは2足というより壺の頸部から胴部そのものが（あたかも人体や獣の腰部を模したかのように）二股についているものである。上記の三足土器とは趣を異にすると言わねばならない。この他、この地域の縄文土器文化のなかに、現在までのところ、これら三足土器の祖形と見られるような器形は認められていない。要するに、自律的な型式展開が認めにくいのである。

他方、この地域には三足土器の他にも縄文文化と中国大陸との関係を示唆する考古資料がいくつか知られていた。先にふれたように、1920年代、喜田貞吉氏はすでに東北地方で出土する石製内反刀、玦状耳飾、玉斧なども大陸の影響であろうことを示唆していた。戦後になって山形県の烏島山麓の三崎山で、明らかに大陸製と思われる青銅製内反刀子が発見され、玦状耳飾も最近の調査によって例数を増し、分布その他のデータから、やはり大陸の影響を見る説が有力になっている。さらに、いわゆる玉斧についても、ごく最近、1995年夏、これも山形県の出羽三山西麓、羽黒町中川代遺跡から縄文中期の土器とともに美しい蛇紋岩製の有孔石斧が出土した。しかもこのよく磨かれた表面には、あたかも甲骨文字ふうの記号がはっきりと刻まれていたのである。石材の材質鑑定を経なければはっきりとは言えないが、伴出関係が確かだとすればこれはもう、大陸からの将来品とまでは言わないでも、少なくとも大陸文化の影響のもとに作られた玉鉞、とって間違いないのではないか。

このように、これまで、ややもすれば孤立的、閉鎖的と見られがちだった列島の縄文文化にも、意外に外世界、少なくとも中国大陸からの影響が及んでいるらしいことは、70年前に比べればはるかに高い蓋然性をもって言えるようになってきた。これはまた、最近の発掘成果に基づいてさまざまに言われ始めている縄文時代像の再検討の動きとも、あながち無関係とはいえないであろう。われわれは現在、ことに三内丸山遺跡の調査を大きな契機として、従来ややもすれば抱きがちだった縄文イメージの転換を迫られている。そのような中で、もちろん極くレア・ケースであるにせよ、はるばる日本海を渡って来た人々と縄文人とが遭遇・接触する光景などを想像する事は許されるであろうし、それはなかなか愉快的なことではないであろうか。

ただ残念ながら、それはまだあくまで推測の域に止まることもまた確かなのであって、それをもう少し具体的な姿として描くには、今少し確実な資料の増加に努めなければならない。今後、東北地方北部で三足土器の出土例がさらに増えるであろうことにほとんど疑いの余地はないが、その他にも、たとえば大分県を中心に九州地方で散見される三足土器らしい資料をはじめ、いわゆる黒陶と黒色磨研土器、彩陶と漆塗り彩文土器など、彼我の間の文物の関係についてもさらに検討し比較研究を深めつつ、なお慎重に論証していく必要がある。

その意味でも、以下の報告では、高橋がまずⅠにおいて三足土器だけに偏ることをあえてさげつつ、それに伴出したとされる虚空蔵遺跡の土器群のすべてについて出来るだけ詳細に記述し、三足土器についても、あくまで縄文晩期の土器文化の枠内のものとして報告し、次いでⅡでは、

この地域の三足土器について、特に四足土器との比較において詳細に検討する。そしてⅢでは、同時期の中国大陸における三足土器、ことに甬の様相について岡内が論考を試みることとする。やはり、両者の関係の有無を正しく判断するためには、中国大陸の甬について詳しく知る必要があると思うからである。

(菊池徹夫)

## I 虚空蔵遺跡と土器

### 1 虚空蔵遺跡の立地と環境

ここに紹介する遺物は、青森県三戸郡名川町字平にある虚空蔵遺跡から出土したものである。昭和20年代、ここで果樹園を営む地主の掛端秀男氏が、リンゴ樹の抜根中に根に絡まるようにして出土した土器を拾いあげた。それを貰い受けた現所有者の沼畑政吉氏が大切に保管されて今日に至ったものである。筆者らはご子息の沼畑正人氏のご案内をいただいて現地を視察し、遺物を検討し記録させていただいた。

虚空蔵遺跡の所在する名川町は、馬淵川の河口である八戸市から、西南方向に20kmほど遡った山間内陸部にある。付近は、馬淵川が形成した河岸段丘と、それに接続する丘陵が発達しており、

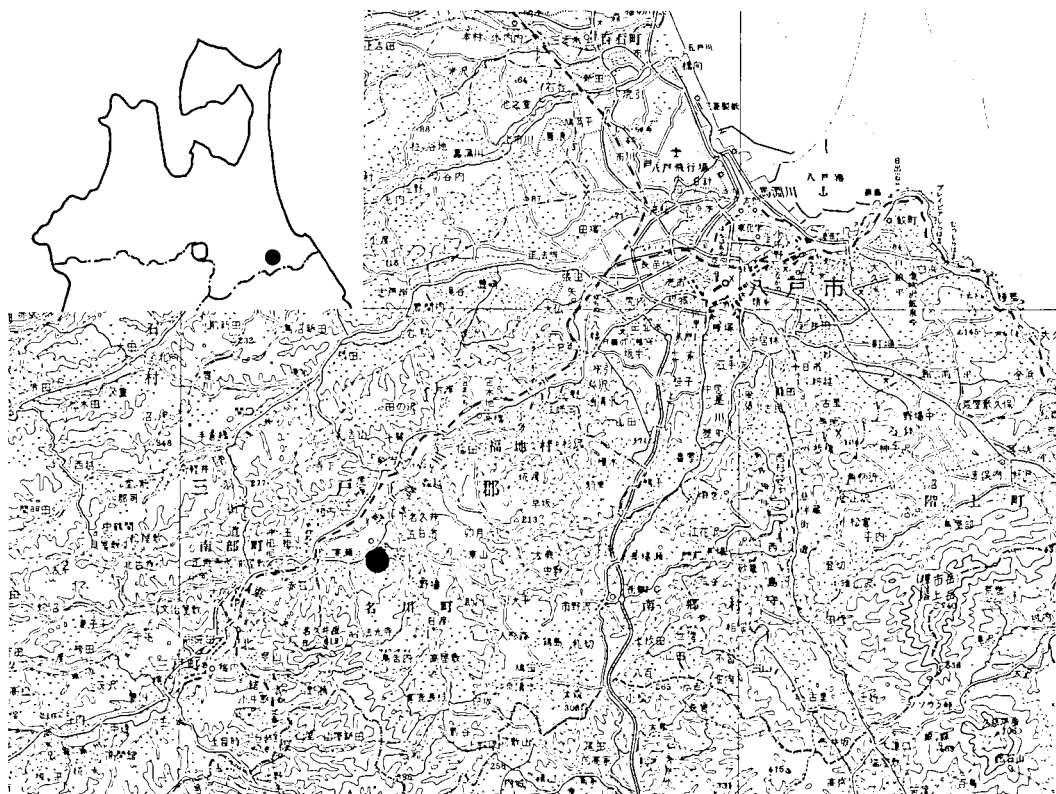


図1 虚空蔵遺跡の位置 (国土地理院「八戸」20万分/1 使用)



写真2 虚空蔵遺跡の現状

虚空蔵遺跡は、そのような低位の河岸段丘に突き出した標高40mほどの丘陵平坦面に営まれている。遺跡は広範囲にわたり、現在名久井第一中学校の校庭とそれに続く平坦部が遺跡の中心部である。遺物が発見された場所は、中学校の校庭から50mほど離れ、街路を挟んで反対側に位置する。遺物が発見された一帯は、現在民家が密集しており、数十年前の果樹園の面影を偲ぶことはできなくなっている（写真2）。

この遺跡は、昭和29年、30年、32年の3回にわたって、慶応義塾大学の江坂輝弥氏により発掘調査された。また、昭和48年には青森県文化課によって、さらに昭和52年には名川町教育委員会によって発掘調査されている。それらの結果、この遺跡が、縄文時代中期・晩期を主体とし、古墳時代を含む複合遺跡であること、また晩期の小貝塚を包蔵することなどが判明した。貝塚からは、晩期のヘアピンや針などの優れた骨角器が出土している。また、近くから合わせ口の甕棺などが出土し、青森県を代表する晩期の遺跡の一つに数えられている。

馬淵川流域には、縄文時代晩期の遺跡が河岸段丘上に並び、当地域の晩期後半を代表する剣吉遺跡は3km下流に位置する。また、晩期前半の代表的遺跡である泉山遺跡は、上流数kmにある。蒔前台遺跡、金田一遺跡、雨滝遺跡など、岩手県の代表的な遺跡も、同じく馬淵川の上流に並んで立地している。

## 2 虚空蔵遺跡出土の土器

沼畑氏が所蔵している土器は完形品で15個体あった。先に述べたように、40年前にリンゴ樹の抜根中に発見されたということであった。抜根に費やす面積は狭いと判断されるので、ここに紹介する土器群は、ほぼ同じ地点から集散的に出土したものと考えてよいだろう。しかし、形式的な弁別によると、必ずしも同一型式に帰属するものばかりではないので、多少の時間的前後があったと判断される。ここでは、その折りに採集された土器を型式別に紹介することにする。

### ① 大洞C1式土器（図2）

この式の注口土器が4点出土している。いずれも頸部が発達して、口縁部で大きく外反する特徴をもつ。壺形の器形の体中央に注口を付したものが2点ある（図2：1・3）。装飾の文様は、いずれも特徴的な磨消縄文であるが、体部を隆帯によって上下2段に分割し、別個の文様を描いたもの（図2：2）と、体上半だけに文様帯をもつものがある（図2：1・3）。後者の場合、文様帯の上下を2～3本の沈線で区切っている。体部文様のうち、磨り消された部分をネガ文様として観察すると、1と2のネガ文様は極めて類似した主要素を用いていることがわかる。

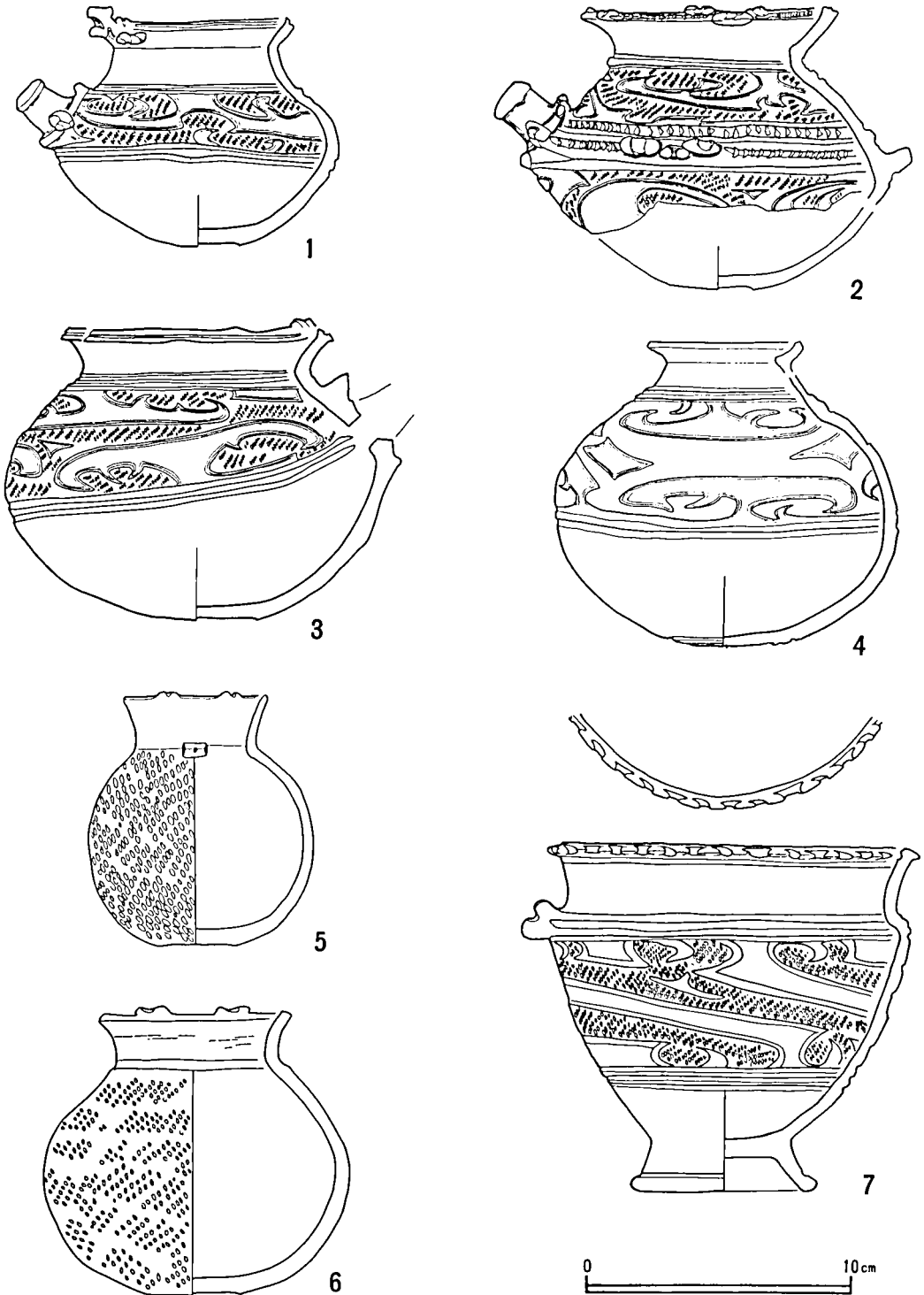


図2 虚空蔵遺跡出土の土器

壺形は合計3点得られている。そのうち精製の壺形は1点ある(図2:4)。下膨れ気味に体部中央で大きく膨らみ、急に収縮して頸部にいたる器形で、上に内傾する頸部を付している。口縁部は大きく外反して、外に開く。文様は体部上半に限定されるが、縄文は施文されずに、浮彫的な文様が器面を圍繞する。正面に描かれたネガ文様の主要素は、同図3の主要素に極めて近い。粗製・半精製の壺(図2:5・6)は、下膨れ状の体部をもち、口頸部を除いて全面に縄文を施文するが、文様はない。

台付き鉢(図2:7)は、鉢形の器形に高さ2cmの台脚を付けたものである。体部には全体にわたって磨消縄文を描き、頸部との境に突起を1個付している。体部のネガ文様は、この地方に一般的な種類である。文様が横に平行化して、間延びしたような印象を与えるのは、主要素が2単位と少ないからである。口唇部に小さな三又状、四又状の抉りを彫刻的に連続させて加え、結果として生じた突起列が口唇部を一周している。

## ② 大洞C2式土器(図3:1~4)

この式に属する鉢形が3点得られている。いずれも体部に文様を施文しない半精製のものである。底部から緩やかに立ち上がり、そのまま口縁に収束するもの(図3:2・3)と、頸部で「く」の字に折れて口近くで再び立ち上がるもの(図3:1)がある。装飾は狭い頸部に描かれた数条の沈線と突起のみで、他に装飾をもたない。口唇部には細かな刻みが連続して並ぶ。

壺形(図3:4)は、体部のほぼ中央に最大径をもち、球胴形の体部にはほぼ直口気味の頸部が付く。装飾は口縁部に限られ、肥厚した口唇部に一条の沈線を施文している。この他に注口土器の大型破片が1点出土している。

## ③ 型式の不明な特殊小型壺と浅鉢(図3:5・6)

5の小型壺は、半球体の上に内傾する頸部を付け、口縁部は短く外反する。底部は、丸底気味の口縁部にごく薄い粘土を貼付した後、その内側を削り出して低くし、中心部が高くなるように仕上げている。そのために壺の安定は悪い。体部下半はヘラ削りで調整され、直後のナデによって器面を整える。ヘラ削り後のわずかな痕跡が観察される。頸部に観察される粘土の接合痕からは、壺が外傾接合で制作されたことが窺える。頸部と体部との境界には、一条の沈線が巡っているが、棒状の施文具を水平に構えて、沈線を引いたことが窺える。この壺は、体部径に対する頸部径の比率が、他の大洞式土器一般と異なって著しく高い。この壺のプロポーシオンを図2:4~6、図3:4などと比較してみると異質な印象を受ける。胎土は比較的粗雑で砂粒を含有し、色調も赤褐色を呈するなど、他の壺類とは異なっている。

図3:6の浅鉢は、「く」の字形に屈曲する頸部に、やや外に突出する口縁部を接合したものである。肩の部分が外に張り出し、屈曲を強調しているが、本来的に大洞式土器には稀な器形である。体部には一切文様をもたずに、ナデによって平滑な器面に仕上げている。器面の所々に剝落した部分が残る、その点では亀ヶ岡式一般の壺形の器面の特徴に一致している。底には2条の

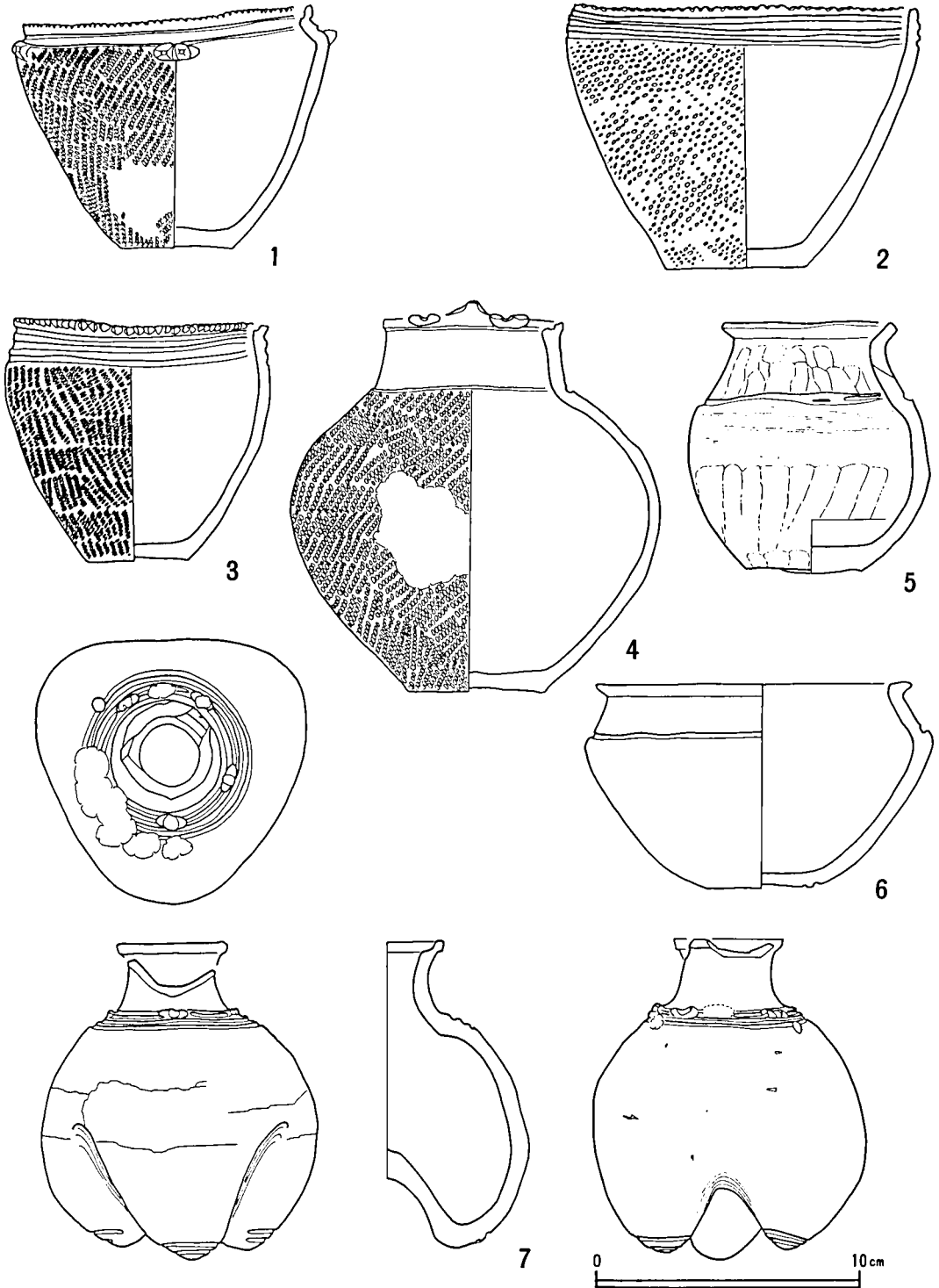


図3 虚空蔵遺跡出土の土器

沈線が巡り、その内側をわずかに削り、底を揚げ底気味に仕上げている。

#### ④ 三足土器（図3：7）

壺形の口縁部下に、膨れた中空の脚が3個集合・合体してなりたっている。脚と体の接合の順序は、三足の内接面と間隙を粘土で内側と外側から補強した後で、その上に粘土帯を輪積みに重ねて接合する方法である。脚部の下端には、それぞれ2条の沈線が巡る。三足の接合部の外面には粘土の補強後に沈線で円文を施文している。頸部は体からやや内斜気味に立ち上がり、口縁部で外に屈曲する。口縁部は短く垂直に立ち上がる。体部の上半の肩には、沈線が平行して4条引かれ、上から2番目の沈線上には2個1対の突起が横位置に、合計5個貼付されている。横長の突起の中央部に、棒状施文具の押圧により窪みが生じている。

### 3 小 結

以上のように、虚空蔵遺跡のこの地点から一括して得られた土器は、大洞式の編年にあわせて、大体2型式に分離できる。大洞C1式土器では、注口土器が卓越しており、しかも体部に描かれたネガ文様は相互に近似した内容を有して、同一型式内における緊密な関係を示している。これほど近似した内容が、一ヶ所からまとまって検出された例は稀である。製作者間に共通したネガ文様の知識、技術が分有されていたことの証拠であろう。一方、大洞C2式土器では、精製土器が欠落しており、相互の関係を把握することは困難であった。また、型式が不明の特殊な小型壺と浅鉢についてであるが、いずれも従来知られていた亀ヶ岡式とは異質な形態を有している点が注目される。両者を一緒にして捉えてよいか問題が残るが、この組合せで近似した内容は、東北地方には見いだすことができない。しいて類例を外部に探すと、愛知県馬見塚遺跡F地点の壺と鉢形の形状に近いことが窺われる。特に浅鉢は、頸部で内側に屈曲するなど、西日本突帯文のものに一致した形態を有している。しかし、以上の形態的な類似点とは裏腹に、調整の手法、整形の手法には、著しい亀ヶ岡式的要素が看取される。壺における頸部の縦方向の研磨調整や、底部の作りだし方、浅鉢の器面に見られる剝落した様子は東北地方の土器によく観察される場所である。形態は外部のものに近いが、それを製作する手法には、在地的な技術が反映しているようである。したがって、仮に外形は外部からの影響のもとに成立したとしても、それを支えた技術的な背景は、やはり青森県の在地的な土器製作技術であったといえよう。

## II 三足土器の検討

### 1 虚空蔵遺跡の三足土器の帰属型式について

虚空蔵遺跡の三足土器は、三足の上に、亀ヶ岡式の壺形の口頸部を付した形制を有している。青森県で発見されているすべての三足土器は、このように体上半が壺形の一部を呈しており、壺形との連絡が強いことを示している。したがって文様や他の装飾が少ないこの種の土器の型式を



知るためには、亀ヶ岡式一般の壺形との比較が重要な鍵となる。

体上半部を比較する上で重要な特徴は、①口縁部の形態、②体部上半の沈線と突起、③体部の形制の三点である。まず①口縁部の形態について見ると、虚空蔵遺跡例では頸部から振り返って、口縁部に小さく区画された段を有する点が注目される。大洞BC式からC1式にかけての精製壺形土器に共通した特徴である。大洞C2式の後半から同A式の壺形では、口縁部の下に口外帯による装飾が巡るのが一般的で、特に精製土器では顕著な特徴となっている。本例では、口外帯をもたない点が注目される。②の体部上半の沈線と突起についてはどうであろうか。本例では沈線の施文される部位は、体部と頸部の接合部付近になっている。大洞C1式の場合、沈線はもう少し低位に施文され、しかもその上位に細い隆起線2条と突起からなる装飾を有するのが普通である。本例ではこの隆起線が欠落している。また沈線上に貼付された突起は、細長くまるめた粘土粒を沈線上に貼付して、その頂上を指で押さえつけるように窪ませ、二つの山に分けたもので、本来的に1単位のB突起である。形態的に図2：2の注口土器の肩に貼付された突起と同類である。これを合計5単位めぐらせている。突起の形状を大洞A式のものと比較すると、同式の突起が、粘土粒を深く広く挟り分けて2個に分離した特徴を有しているのとは対照的である。突起の形状では、大洞BC式からC1式にかけての特徴に近似する。③体部の形制について観察して見ると、肩から以下にかけてのプロポーションが、撫で肩になっていて、そのために体部の最大径が下方に押し下げられて、その結果、下膨れの形状を呈することになっている。大洞B式やBC式では、体の中央付近に最大径をもつものが一般的で、多くは球胴状になっており、本例とは異なっている。大洞C2式後半から同A式までは、最大径が体部上半にせり上るものが多く、その結果、頸部直下で肩が横に張った形になるものが多い。体部の形制と関連するのは文様帯の変化である。虚空蔵例の足部の先端に巡る2条の沈線は、体上半の沈線と呼応して広い体部文様帯を区画する沈線だと考えられる。このような広い文様帯を有する壺形は、大洞BC式、C1式に顕著であるが、C2式以後の壺では文様帯が収縮して上退する傾向がある。図5の今津例や富ノ沢例の区画沈線が、体上半にせり上っているのは、それと呼応した動きであろう。

以上のように、亀ヶ岡式一般との比較から、本例が大洞C1式の壺形に近いことが看取されるであろう。共伴したとされる精製土器に同式が多いのも参考になるかもしれない。しかし、頸部と体部の境界付近に巡る隆起線を欠いたり、沈線の引き方など通常と異なる点もあり、一方で大洞A式との類似点もあることから、ここでは大洞C1式との近似を指摘するに留め、今後の課題としたい。

## 2 東北地方出土の三足土器の比較

今日までに東北地方で発見されている三足土器は計4点である。東北地方の三足土器はその分布がすべて青森県に限定される(図4)。現在までの出土分布をみるかぎり、同県がその製作の

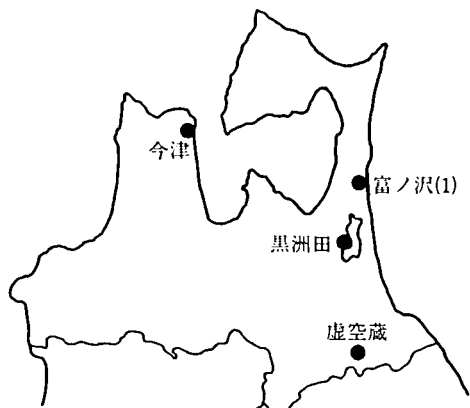


図4 三足土器の分布

中心地といってよく、同県を中心に独自の展開があったことが知れる。

今津遺跡の例は、横に張った肩部の下に発達した足が付されている点に特徴がある。また足の先端が尖状を呈する点も見逃せない。富ノ沢(1)遺跡例や虚空蔵遺跡例では、下膨れの壺体部に三足が付される形態を呈し、足の先端は丸みを帯びている。足部の形制は黒洲田遺跡例(写真1)も近似しているが、体部上半に最大径を有する器形は、大洞A式の壺形に多いことは先に述べた。また、今津遺跡例は体部が磨消縄文の文様で飾られるなど、無文である他例とはやや異なった特徴を有する。今津例は、一般に大洞C2式の文様として説明されることが多いが、しかし、大洞C2式の壺形の文様とは異なり、むしろ北海道から青森県北部に分布する聖山式の特徴に近い。体部の磨消縄文のうち、ネガの主要素が横に連鎖して、互いに入り組む特徴は、聖山式の大きな特徴である。同じ文様は同期の大洞C2式土器にも観察されるが、壺形では稀である。大洞式では、鉢形や台付き鉢に同様な特徴が顕在化し、壺形には殆ど施文されない。一方、聖山式ではその反対に、壺形には入り組み文が顕著であって、鉢形や台付き鉢には工字文が発達する。今津例は壺の体部の形制を維持しており、文様との関連で、聖山式の可能性が非常に高い。聖山式は大洞式土器との対応で、大洞C2式の終末ないしは、続く大洞A式に対比されるから(高橋 1992)、同例の年代についても、考慮する必要がある。肩が横に張る特徴もそれとの関連で考える必要があろう。

虚空蔵例は、足の断面形態が富ノ沢例と一番近似している。しかし、富ノ沢例では体部中半に2条の沈線が器面を巡るのに対して、虚空蔵例や黒洲田例にはそのような沈線はない。また黒洲田例では、体と足の境に沈線が巡り、ほかの例とは異なっている。虚空蔵例では、それに対応

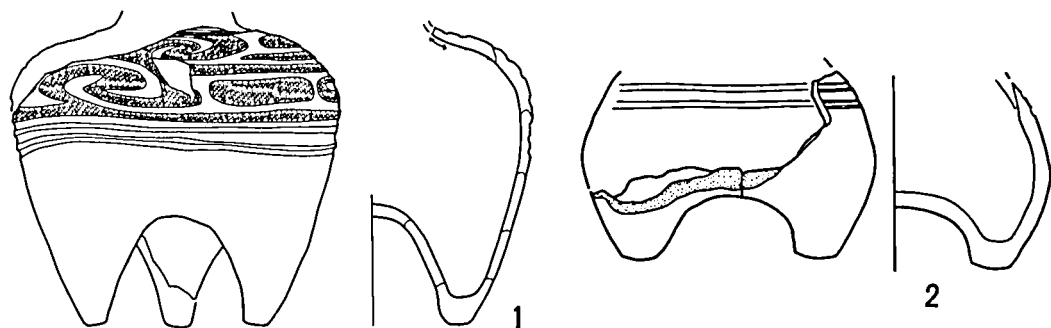


図5 三足土器 1:今津遺跡 2:富ノ沢(1)遺跡

する沈線は足部の先端近くに施文されており、それが文様帯と関連することはすでに述べた。富ノ沢例と黒洲田例は三足の高さが低くみえ、この点で今津例・虚空蔵例とは異なっている。このように、現在発見されている各地の三足土器を比較すると、まったく同一形状のものはなく、個々に異なっていることがわかる。帰属型式が異なるのかもしれない。しかし、現在の知見で、大洞式前半に属する例が殆んどない点は、三足土器の特性を考える上で重要である。

### 3 三足土器の系統と由来

さて、三足土器の由来については、大陸を視野に入れた広域な交流の結果齎らされたとする説がある。古くは黒洲田遺跡の三足土器にいち早く注目した喜田貞吉が、先史時代における中国大陸との交渉を積極的にとらえて、年代上・民族上の問題として独特の解釈を示した。(喜田 1927)。九州の一部で発見される三足土器について、賀川光夫氏はそれらが黒陶類似の黒色土器と相伴することに注目し、大陸との交渉を肯定的にとらえた(賀川 1961)。この説を支持したのは、梅原末治氏で、玦状耳飾りや大分県秋葉遺跡の有足土器をもとに、積極的に大陸との交渉を推定した(梅原 1983)。これらは総じて渡來說と呼ばれる。一方で三足土器は亀ヶ岡式文化の中で、自律的に生成したと考えることも可能である。前者の渡來說に対して、これは自生説である。自生説が説得力をもつためには、三足土器の祖源が国内で辿れて、しかもそれからの変遷過程が明らかにされる必要がある。他方、自生説が渡來說に疑問を呈するのは、大きく二つの視点からである。第1は、四足土器との関連においてである。大洞B式、ないしBC式の壺形および鉢形の底部に、内側から外に向かって押し出したように作られた四足土器があり、それとの形態的な類似を否定しがたいからである。同時期の土器中に三足土器と類似した特徴があるのは、自生説に有利に働くであろう。第2としては、三足土器にみられる顕著な在地的様相である。青森県の三足土器は純正な髙ではなくて、亀ヶ岡的に独自にアレンジされた形態であり、特に口頸部に壺形のそれを当てている点を渡來說に対する有力な反証として評価するのである。

近年、中国側からも積極的に発言がなされている。安志敏氏は長江流域からの強い影響の下に、日本の三足土器が生成したと説いている(安 1985)。日本側からは、以前ほどの積極派は少なくなっている。今津遺跡で三足土器を検出した新谷武・岡田康博氏は、慎重な態度をとりつつも、今後の資料の増加によって、大陸との関連を否定できない日が将来やってくることを展望している(新谷・岡田 1986)。また最近、福田友之氏は三足土器を含めて、翡翠をはじめ多くの文物が日本海経由で日本各地から招来されていたと推定し、青森県が海上交通の上で果たした重要な働きについて推測している(福田 1990)。

### 4 四足土器の型式変遷と分布

上で見たように、四足土器と三足土器の関係は、両者の関係肯定的に見る立場でも、また否

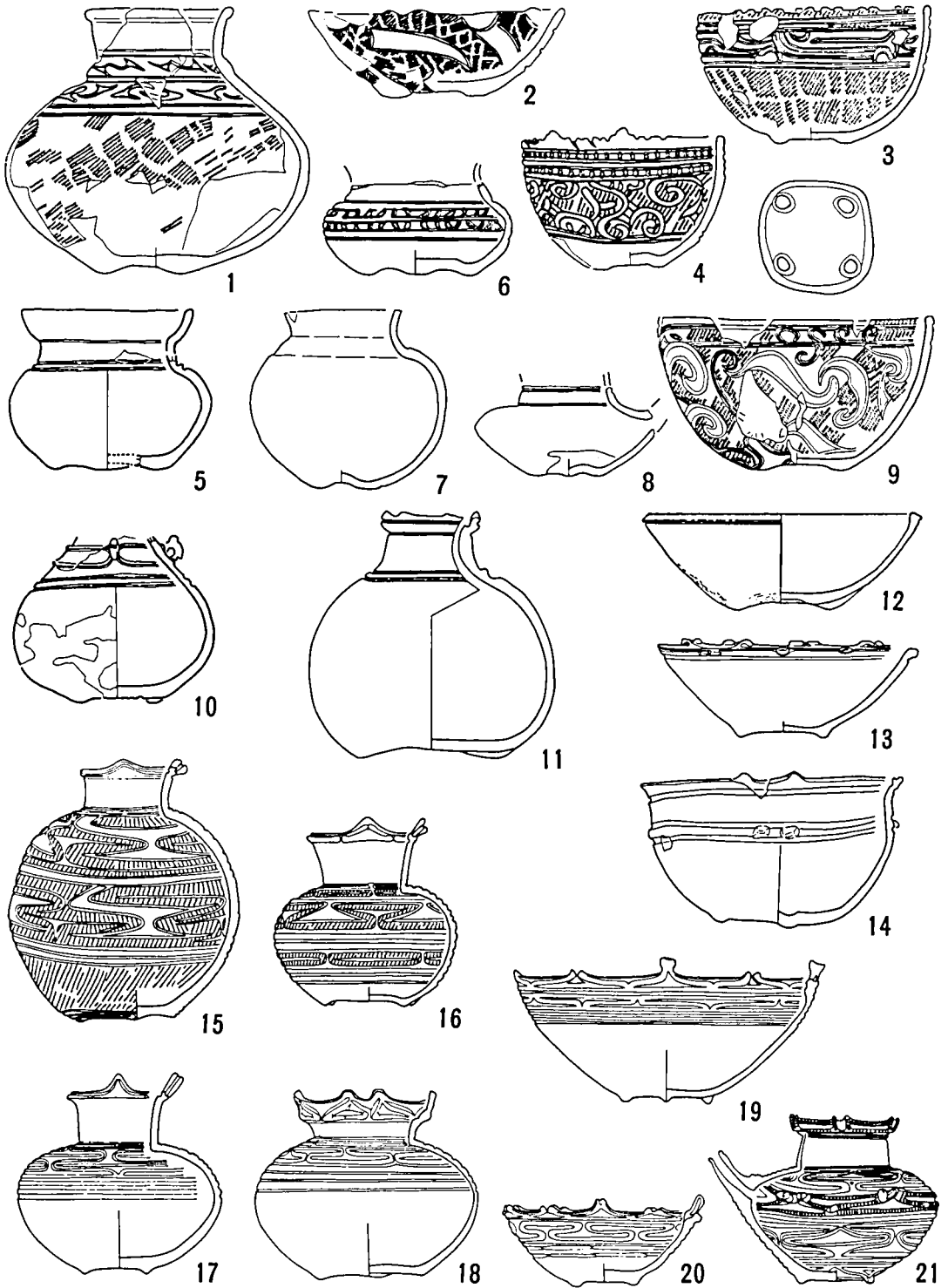


図6 東北地方各地の四足土器（縮尺不同）

（1～9：青森県泉山遺跡、10：岩手県上平遺跡、11：青森県田屋久保遺跡、12：青森県細野遺跡、13：青森県松元遺跡、14：青森県今津遺跡、15～21：岩手県九年橋遺跡）

定的に見る立場からも避けては通れない、重要な検討課題であろう。ここでは、両者の関係を編年的な視点と、地理的な分布の観点から述べたい。その前に簡単に両者の異同について述べてみよう。四足土器は、袋状の体下半部を有するのではなく、器の四隅を内側から外に押し出すようにして、外に膨らませる手法で造形される。この点で、三足土器が予め袋状に作った単位を3つ寄せ集めて一体となすのとは、まったく製作手法が異なっている。両者の根本的な差異は、三足土器が袋状の中空形態を呈して、それ自体が容器であるのに対して、四足は四隅の整形過程で出現する、いわば底部の変形、派生的な在り方であり、容器としてはそれ自体全く意味をなさない点である。外見上の類似は否定しがたいが、内容には相当な差異があるといわねばならない。四足の形状には2種類あって、壁面の内側を押し出すように作り出したもの他に、粘土塊を棒状に尖らせて四本を底部に付着させ、あたかも柱脚状を呈するものもある(図7)。後者の成立過程は全く異質であるというべきであろう。

四足土器について、型式学的な視点から眺めてみよう。四足土器は、型式的に連続する点で一代限りの短命な器種ではないことがわかる。大洞式土器の型式編年にあわせて各地から出土した四足土器を調べてみると、数型式に亘って連続していることが知れる。三足土器との関連を見るために、ここでは青森県東南部から岩手県を中心に、なるべくまとまった地域から出土した四足土器を集成して、変遷の様子を見ることにする。四足土器の晩期最古例は、青森県石郷遺跡例や、岩手県泉山遺跡の大洞B式に遡る。石郷では浅鉢に、また泉山遺跡では、壺形の底に四足が付されたもの(図6:1)と浅鉢(図6:3)が検出されている。次の大洞BC式になると、四足土器の出土例が増加し、上記の泉山遺跡の報告書では、多器種に亘って合計20個の四足土器が図示されている。そのうち多くは壺形に付されたもので、特に扁平な体部の壺形に付されるものが最も多い(図6:5~7)。この時期には壺の他に、浅鉢(図6:2・4・9)、注口土器(図6:8)が見られ、前代に比して器種が拡大している。ここの注口の四足と後代の注口の四足土器が系譜関係を有するかは判然としない。大洞C1式の四足土器は例が少ないが、山形県蟹沢遺跡や岩手県上平遺跡(図6:10)で検出されている。また、浅鉢の四足も継承されており、青森県細野遺跡(図6:12)、同松元遺跡(図6:13)で認めることができる。この時期から次の大洞C2式古段階では、資料がはなはだ少ない。わずかに青森県今津遺跡出土例(図6:

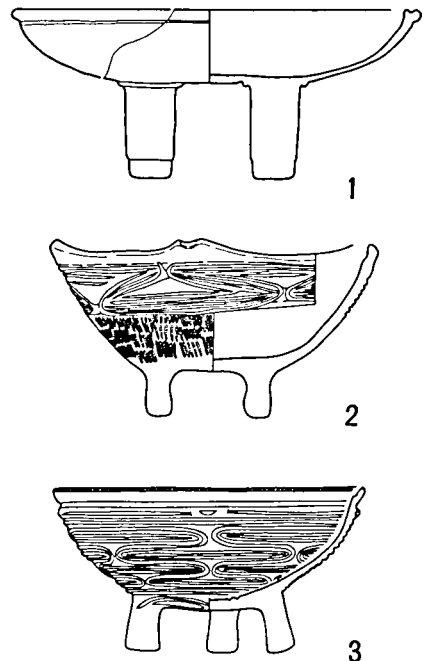


図7 柱脚状の四足土器

(1:青森県細越遺跡、2・3:岩手県九年橋遺跡)

14) しか見当たらない。青森県田屋久保遺跡の一例 (図6:11) は、報告者によってC 2式からA式に相当すると推定されている。

大洞C 2式中・新段階になると資料は再び増加する。岩手県九年橋遺跡では、大量の四足土器が検出されていて、多くは小型の壺形と鉢形に重点的に付される (図6:15・16)。同じ器形で、同じ文様を施文された大型壺には四足は付されない特徴がある。大洞A式になると、今まで以上に増加し、四足土器の盛行をみる。前代からの系譜で小型壺には殆どに四足が付されるし (図6:17・18)、同様に浅鉢の殆どが四足をもつ (図6:19・20)。これから移植されたと考えられるのは注口土器 (図6:21) で、前型式までは全く四足が付されない器種だったのが、この時期を迎えると急激に数量を増す。前型式にはないことを考えると、キメラとして、同時期の小型壺や浅鉢から移植された可能性が高い。この式の四足土器は広く行き渡り、大洞A式の分布する範囲内で観察される。しかし、四足土器が発見されるのは、A式までで、それ以後には急速に

失われてしまうかのようなのである。A'式には見られない。宮城県青木遺跡では、A'式直後のまとまった土器群に四足土器が伴って報告されているが、断片で、しかも文様がなく、決め手に欠ける。

このように四足土器の発達と展開を概観すると、壺形と浅鉢を主とする四足土器は、大洞B式から連綿と継承され、途中で資料が少ない時期があるが、大洞A式まで系統だって辿ることができる。東北地方一円に独自の発達と展開があったことが知れる。四足土器の起源に三足土器が関与することは全くなかったといってよいし、また四足土器から三足土器が派生することもないといってよいだろう。四足土器は四足土器の系譜にしたがって別途に変遷しているからである。三足土器の年代について、仮に虚空蔵例が大洞C 1式とすれば、それが最古の位置をしめることになり、他の多くはC 2式終末からA式に併行すると考えられる。三足土器は短期間のうちに忽然と出現し、忽然と消えていくのである。四足土器とは全く整合面をもたずに消長している。

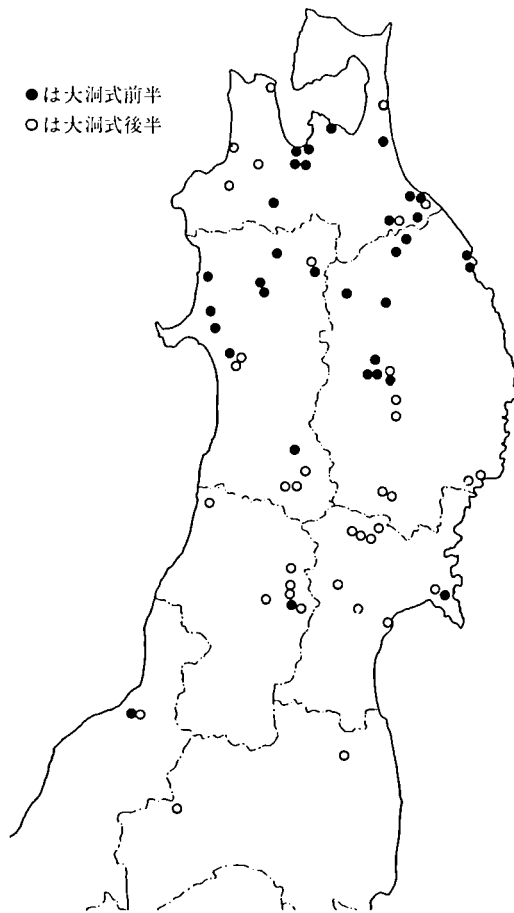


図8 四足土器の地理的分布

上記の四足土器の編年的な位置付けにしたがって、便宜的に大洞B式からC1式までを前半期とし、C2式からA式までを後半期として、この二者の地理的分布を示したのが図8である。前半期のうち、大洞B式に相当するのは、現在の知見では、青森県と岩手県に限られるが、BC式以降になると青森県、岩手県、秋田県の三県を中心として、点数は少ないが宮城県、山形県まで分布が拡大して、遠く新潟県にまで達している。分布に見られる若干の濃淡は、今までに調査された遺跡の密度に関係すると考えられる。C2式以後の後半期になると、青森県や岩手県北部、秋田県北部にも分布するが、むしろ、岩手県南部、秋田県南部、宮城県北部、山形県北部に分布の中心が移動するがごとき、特に密集した様相を呈する。この地域にこの時期の遺跡が多く集中するのと符号している。分布は新潟県や福島県、栃木県にまで及んでおり、前半期と等しく、亀ヶ岡式の分布範囲内で変遷していることが窺われる。大洞A式以後に、福島県以南で展開した浮線文土器群には四足土器は見られず、新潟県新発田市館の内遺跡で発見された四足土器は、本場の東北地方から搬入されたものと調査者は推定している（新発田市教育委員会 1992）。

このように四足土器は出現から終末までほぼ東北6県の中で展開したことが看取できる。これを三足土器の分布（図4）と比較すると、差異は歴然としているだろう。三足土器が青森県に限定されるのに対して、四足土器は広く東北地方一円に遍く分布しているのであって、この点において両者は別途の発展と展開を遂げたということができよう。両者が互いに関連しながら推移したとは考えにくい。少なくとも現在の所見では、青森県以外の諸県では、四足土器との関連で三足土器は生成していないことは明らかであり、したがって三足土器の出自を四足土器との関連で捉えることは困難であるといわねばならない。編年的の分析でも見たように、また分布の上からも四足土器と三足土器の系譜は別であると考えられる。

## 5 有足土器とキメラ現象

それでは、三足に亀ヶ岡式の壺の口頸部が付されるという、在地的な特色はどのように考えればいいのだろうか。これこそは、自生説が説く重要な根拠の一つであるから、やはり検討の必要がある。

亀ヶ岡式土器の各器種間には、その器種独特の形態を呈する一方で、他の器種と相互に一致した形態を有するものがある。これは、異なる器種間で、部分的なパーツの置き換え、移植が行なわれたものとして理解されている。かつて山内清男博士は、この現象をキメラ（接木）と称され、亀ヶ岡式の大きな特徴に数えられた（山内 1964）。注口土器の口縁部に所謂香炉形土器の天蓋が付された例や、壺形に他の器種が接続された例などは、古く山内清男博士が指摘されてきたところである。先に述べたように、大洞A式になって、壺形の四足の底部が、同式の注口土器の底部として採用されるのも、同一の現象として理解されるであろう。このようなキメラ現象を晚期全体を通して俯瞰してみると、壺形がベースになって同現象を引き起こしていることが非常に多

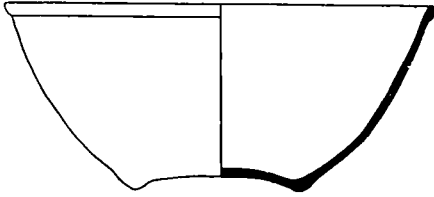


図9 亀ヶ岡遺跡出土の籃胎漆器

いことがわかる。小型壺の偏った球胴の上に、徳利形を接合した例は、大洞BC式にごく一般的にみられる。また、壺に台脚を付した珍しい例も泉山遺跡で出土している。四足土器も、壺形をベースにして、底に四足を付したもので、これを一種のキメラと見ることができる。同じく壺形をベースにして、

三足を付した三足土器も、その点で強い関連が窺われる。

そもそも四足という底部の形態はどこに由来したのであろうか。是川遺跡では、籃胎漆器などに四隅を外側に突出させて四足状を呈するものが多くある。編籠の形状がそのまま反映していると考えてよいであろう。体上半が扁平な壺形籃胎漆器もあり、BC式の壺形四足土器との強い類似点を見いだすことができる。また、亀ヶ岡遺跡などでは、四隅を突出させた浅鉢形の籃胎漆器(図9)も出土しており、同形の土器との類似が指摘されている(図6:12・13)。共通する底部形態は、これら籠の四隅を外側に突出させた形状を土器に転写したのではないかと疑いを抱かせる。これは一種の材質転換であり、異なる材質の間でやりとりがあったことを窺うことができる。柱脚状の四足(図7)はどうであろうか。先に述べたように、前半期の大洞C1式からあり、遡源はもっと遡ると考えられ、他の一種と同様に晩期初頭ないしは、後期末まで遡る可能性が強い。柱脚状の四足は、籃胎漆器には見られない。同様な四足を他の材質ともめると、同時代の石皿の背面に付けられた四足の柱脚を想起することができる。この石皿の形態をそのまま土器に模した例が泉山遺跡で出土している。

このように、四足土器の出現には籃胎漆器の底部や石皿など、材質のまったく異なるものからの模倣や転写があり、それと同時に土器間でキメラが起こっているように見える。異器種間は勿論のこと、異なる器材においても同様の現象を引き起こすのは亀ヶ岡式の大きな特徴であろう。

四足土器については、このように模倣ないしは材質転換を前提にキメラ現象を引き起こしており、その原典となるものが、亀ヶ岡式内部に実際に存在したことが窺える。しかし、三足土器については、いまだにそのようなメカニズムで生成する原典を国内に見いだすことができないのである。今後、このような視点で、三足のものがあるか、類例を集めていく必要がある。重要なのは、模倣・転写でも、キメラでも、土器を製作する論理的背景として、亀ヶ岡人の身のまわりに現存する材料を使用しており、架空の材料がない点である。

壺形の口縁部を有することで、三足土器を髙とは無関係なものとの議論が一部にはあった。しかし、渡来説を唱える研究者でも、これそのものを本場の髙と同じであるといっているのではない。日本の三足土器が成立する上で、中国の髙が関与している可能性があるかどうかを議論しているのである。概観したように、彼我の口縁部形態の違いから、三足という類似を他人の空似として無関係だと捨て去ることができない、いわば亀ヶ岡式の土器製作の論理があることを述べた。



このような折衷的な製品が生み出される背景として、亀ヶ岡式の製作の論理である転写やキメラを踏襲して出来上がっている点を重視したのである。キメラとして、壺形をベースに行なうやり方は、この時代の亀ヶ岡式の流儀に即したやり方といえる。この種の土器は鬲形といっても、本場中国産のものとは異なるのは勿論のことで、製作にあたって亀ヶ岡式の技術や流儀をそのまま反映している点は、仮にこれがキメラとして採用される手本として本場の鬲があったとしても、亀ヶ岡式人の手によって一度改変されていることを示している。したがって、そのコピーそのものではありえないこと十分に承知しておく必要がある。今後そのような鬲そのものが検出されるか否かは未知数であるが、もし現存したらこのようなキメラが生じる可能性はきわめて高いといわねばならない。

本稿を草するに当って、石川日出志、片岡宏二、小林圭一、小山彦逸、鈴木正博、中沢道彦、中村五郎、中村友博、成田誠治、西谷正の各氏から種々御教示を賜った。また青森県東北町黒洲田の三足土器については盛田稔氏より写真を拝借し、多くの御教示をいただいた。感謝申し上げる次第である。

(高橋龍三郎)

### Ⅲ 東アジアの三足土器

三足の土器を東アジアで探すと、中国の類例を挙げることができよう。三足土器としては、「鼎の軽重を問う」という諺で有名な鼎をはじめ、鬲、甗、盃、罍、罕、爵などがある。

このうち虚空蔵遺跡の三足土器に最も類似した形態をとる器種は、鬲である。鬲は甗形や壺形、鉢形の底部に中空で袋状の三脚をつけた器形である。三脚は革袋のように膨らみ、その部位で熱をうけて湯を沸かすのに都合よくできている。そこで鬲は、煮炊や上に甗を載せて穀物などを蒸すための調理具として主に使われたのである。時代は仰韶文化末の廟底溝Ⅱ期文化（B.C. 2780±145・樹輪補正年代）に始まり、戦国時代末（B.C. 200前後）まで作られ続ける。地域的には黄河流域の中原に出現し、そのご中国各地に分布を拡大していく。

#### 1 中原地区の三足土器

鬲の古い例は、仰韶文化末の廟底溝Ⅱ期文化に出現することは既に述べた。頸部がくびれ、胴部の屈曲する壺形に中空の三脚がつく器形である。龍山文化の客省莊Ⅱ期文化になると、口縁部がくびれ筒形胴に太い中空の三脚がついた定型的な鬲になる。胴部全体に縄席文を圧印し、頸部から口唇部にかけては回転によるナデ調整を施している。商（殷）から西周にかけては、最も鬲が盛んに作られ、使われた時代である。商（殷）の鬲は、壺形の器形が多くなり、中空三脚の先端部のみが中実の錐状になった器形もある。また鬲と甗とがひとつに合体した甗が發明される。そして青銅製の鬲が出現し、次第に祖先祭祀の青銅葬器へと変貌していく。西周時代の鬲は、口縁部はくびれ、壺形または鉢形の浅い胴部に底部と浅く短い中空の三脚が連なる。戦国時代に

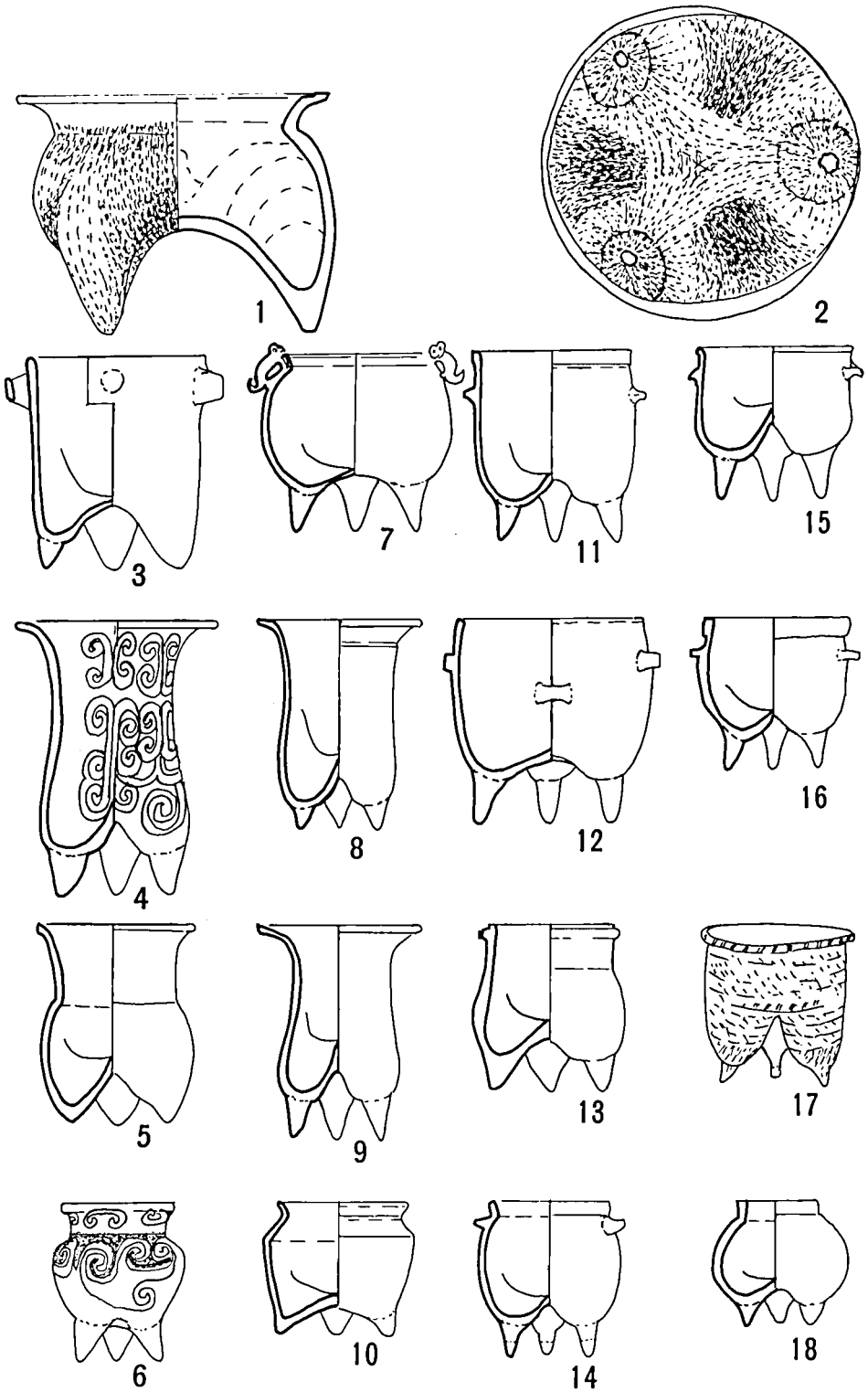


図10 中国出土の鬲 (縮尺不同)

かけて三脚が短かく小さく退化する傾向にある。これらの鬲は煮炊き用の実用品であるが、しばしば墓の副葬品としても出土し、1基に2—3個副葬した場合も珍しくない。

この中原の鬲について、北京大学考古博物館所蔵の山西省曲村M6190号墓発掘品 no. 2 を例として、製作方法を観察した(図10:1,2)。

鬲は、口径12.4cm、高さ9.5cmで、灰色を呈し硬く焼け締まっている。表面には微細砂粒と雲母とが肉眼で観察できる。この土器の製作方法(成形と調整)を観察すると、胴部は壺の形態であり、これに短い中空の三脚が付く。口唇部は回転ナデ調整で、頸部は縄蓆文の叩きを上半部のみ水平方向にナデ消している。これに対応する内面は、ナデ調整である。胴部から脚部にかけては、外に膨らみをもつ鼓腹で、全面に縄蓆文の叩き痕が残る。内面は叩きをうけた当て具痕が半円形に連続して観察できる。脚と脚との間の胴下半部には、縄蓆文の圧痕が狭く密になっている部位がある。仔細に観察したが、縄蓆文叩きの原体に大小の2種があるわけではない。中空の脚部は、先端部に近い部位に粘土の継ぎ足し痕が一周する。これに対応する内面は中実になっている。胴下半部から続く叩きの上に、脚先端部の叩きが重ねられている。

これらの観察結果からこの鬲の製作方法を復原すると、以下のようになる。

まず口縁部の開いた浅い壺を作り、頸部から胴、底部にかけては縄蓆文を圧印する。そして頸部上半はナデ調整で縄蓆文を消している。生乾きの状態で胴下半部を押さえて、底部に3個の乳頭状突起をつくる。この成形作業で最初につけた叩きが、袋状中空に膨らむ脚部では間隔が開き、脚部と脚部との間の胴下半部では逆に絞られて間隔が密になるのである。乳頭状突起の内面に円棒状の当て具をあて、外から縄蓆文をつけた叩き具で叩いてのばし、中空の三脚をそれぞれ成形している。この作業で脚部先端の粘土が引きのばされて薄くなったために、先端部に粘土を補充している。その追加した補充粘土の接合面が、脚部先端に明瞭に認められる。そして追加した補充粘土の上に縄蓆文の叩きを加えられ、鬲の成形がおわる。中原の鬲は、このように甕や壺、鉢の形から胴下半部や底部を変形させて、中空の三脚を作り出すことによって成形している。

この他に遊離資料ではあるが、早稲田大学文学部所蔵の鬲5個をさらに観察し、ほぼ同じ脚部叩きだしの成形方法をとっている事実が確認できた。

## 2 東北地区の三足土器

ここでいう東北地区とは、内蒙古東部、遼寧省、吉林省、黒龍江省を含んでいる。東北地区西部には、商(殷)・周時代に併行する夏家店下層文化と夏家店上層文化とがあり、東北地区東部には、西団山文化がある。両地域とも中原の文化と密接な関係を保ちながら、前者は内蒙古を通じてより西北方のオールドス地方との関連が深く、後者はシベリアや沿海州との連係がある。

まず夏家店下層文化の鬲は、内蒙古敖漢旗大甸子で発見されている。器形は四種に大別できる(図10:3-6)。aタイプは、筒状の甕形に中空の短い三脚がつき、上端部に橋状取っ手がついて

いる。bタイプは、長い円筒状の甕形に先端部が中実になった短い中空の三脚がつく。cタイプは、長い頸部をもった壺形で、太く短い中空の三脚がつく。dタイプは、短い頸部のつく壺形である。大甸子では胎土が赤く、表面は磨研されその上に赤と白の鉱物顔料で文様が彩絵されている。

遼寧省南山根では、形態の異なる3種の鬲が出土している(図10:7-10)。aは、球状をした浅鉢に細い三脚がつき、上端部に獣形取っ手をつけている。bは、長い円筒状甕形の胴部に短く小さい中空の三脚がつく。dは、口縁部の締まった壺形に短く太い三脚がつく。沈陽市新楽や遼寧省林西の鬲は、aタイプに属する器形である(図10:12, 16)。

このように東北地区で出現した鬲には、多様な形態差がある。土器成形は粘土紐の輪積みで主に作られ、調整に轆轤回転を利用したものがある。実用品は焼成温度が高く灰色で、外面に縄席文を圧印する。中空の脚部を先に作って、底部に接合した例がある。

次に夏家店上層文化の鬲は内蒙古夏家店で出土した例があり、ふたつのタイプがある(図10:11, 14)。ひとつはaタイプで、筒状の甕形に浅く短い中空の脚がつき、先端部は中実である。今ひとつはdタイプの壺形に浅く短い中空の脚がつき先端部は中実で尖っている。dタイプの胴の上部に取っ手がついている点は、地域的な特色を示すものである。

内蒙古龍頭山の鬲(図10:15, 18)は、aタイプの円筒状胴部にやや下膨らみの中空な脚部をつけ、それに中実な先端部がついている。dタイプは、締まった口頸部から腹部と脚部が大きく膨らみ、短かい中実の先端部に終わる。遼寧省喀佐后墳では、aタイプの長い胴部に太く短い中空の脚部がつく。口縁部に突帯をめぐらし、その上に刻みをいれている(図10:13)。黒龍江省白金宝からは、円筒形の胴部に乳頭状中空の三脚がつくaタイプが出土している(図10:17)。上端部と胴の一部とにそれぞれ突帯をめぐらし、その上に刻みをつけている。また、胴部と脚部、脚先端部では、叩きの方向が異なり、脚部接合であることがわかる。

西団山文化の鬲は、赤褐色の夾砂紅陶で、粘土紐の輪積み成形である。取っ手や脚は多くの場合先に作って、器壁や底に孔をあけて差し込み接合する。接合部を削ったり磨いて調整している。鬲の中空な脚部は浅く丸く、円錐形中実の先端部を付加した例もある。完形の良好な資料がないために図示できないのは残念である。西団山文化の鬲や鼎は、住居址での出土例は多いが墓に副葬した例は稀である。この点でも中原のありかたと異なっている。

### 3 結 論

東アジアの三足土器の中で、虚空蔵遺跡の例と類似するのは中国の鬲である。その始まりは、仰韶文化末の廟底溝Ⅱ期文化(B.C. 2780±145)まで遡る。しかし形態からみて関連を探れば、壺形に中空の三脚がつく器形に求めねばならない。このタイプは中原では商(殷)の時期には出現する。しかし脚部は叩きだしであり、虚空蔵遺跡の三足土器とは成形方法が異なる。形態や脚

部接合の成形方法で類似する例を求めれば、中国東北地区の三足土器が挙げられよう。夏家店下層文化（B.C. 2410±140、B.C. 1890±130）のdタイプの鬲と西团山文化（B.C. 2095±100）の鬲とが候補に挙げられる。しかも埋葬地ではなく住居址や包含層などの生活遺跡で出土する点も、虚空蔵遺跡など日本の三足土器出土遺跡のありかたと一致する。もしも虚空蔵遺跡の三足土器が東アジアの三足土器と関連があるとすれば、殷末周初に始まる中国東北地区から沿海州にかけての鬲dタイプと関わる可能性を探らねばならない。しかしなお両者の距りは大きいので性急な結論は避け、資料の増加を待つことにしたい。

山西省曲村M6190号墓出土資料の調査にあたっては、北京大学考古系の李伯謙教授と趙化成助教授のお世話になった。また、講演で張忠培先生が早稲田大学に來学した時に虚空蔵遺跡の三足土器を実見していただいた。その際に鬲の脚部接合法は、東北地区の独特な成形方法であるとアドバイスを得た。ここに記して御厚意と御教示を感謝いたします。（岡内三眞）

## 後 記

1995年は、1月17日未明に突如兵庫県南部を襲った大地震で波乱の幕を開けた。神戸の惨状を伝えるニュースに釘づけになっていた21日朝、旧知の早稲田大学理工学部教授、足立恒雄氏から電話が入った。氏の知人に珍しい土器を持っている人がいるが、一度見てくれないか、といった内容だった。

失礼ながら、そこまでならよくある話である。じつはそれよりも、さっきから何度かけても電話が不通な神戸の知人の安否が気になっていた私は、足立氏の話にも少し気のない返事をしていたらしい。

こちらのそんな気持ちを読まれたのか、氏は少し困った様子で、「私は素人で全く分からないんだけど、持ち主はかなり重要なものじゃないか言っとるんですよ」と言葉を継がれた。「何でも、出たのは青森の名川町ってとこで、そうそう底に足が3本ついとるとか…」

いくらぼんやりしていたとはいえ、そこまで聞いて私の声は変わった。

すぐにも見たかったがなかなか都合がつかず、結局、所有者の沼畑正人氏の依頼で、氏の同僚の飯島誠氏が問題の土器を私の研究室に持参されたのは2月13日のことであった。箱から取り出されたそれは紛れもなく鬲様三足土器であった。そしてそれは、やはり縄文晩期のものであろうと思われた。

3月20日に起こった例の地下鉄サリン事件で世情あわただしいなか、3月30日には比較のため青森県郷土館に赴いて、改めて福田友之氏に今津遺跡の三足土器を見せていただき、また東北地方の三足土器に関する情報について種々ご教示頂いた。一方、件の土器の所蔵者で現在、株式会社東急コミュニティーの早稲田管理事務所にお勤めの沼畑氏にも直接お目にかかり、この土器に纏わる事情などをお聞きすることが出来た。それによってわかった話の要点はおおよそ次のよう

であった。

- 1 出土地は青森県三戸郡名川町、現在の町立名川病院前の当時リング畑だったところである。
- 2 発見されたのは、今から約40年前、昭和20年代である。
- 3 当時、同所の地主であった掛端秀男氏がリングの樹の抜根の際に偶然発見されたものを、正人氏の父君の沼畑政吉氏（大正2年生れ）が譲り受けられて、長年大切に所蔵してきた。
- 4 発見の際、数個の土器が一緒に出たが、それらは現在、南部町相内の沼畑氏所有の家に保管してある。

ところで私は、この土器について観察、撮影など基礎的な作業を行なうとともに、これまでいくつか知られている三足土器の諸例について改めて資料にあたった。その結果、この土器の重要性を今更ながら痛感し、なるべく早い機会に学界に公表し、より多くの研究者のご意見をいただいたほうがよい、と思うに至った。

幸い、同僚の岡内三眞教授は、鬲など、いわば三足土器の本場中国の考古学に詳しく、列島への大陸文化の影響といった問題にも大いに関心を持っておられる。また、ちょうどその年の4月からは、高橋龍三郎氏が助教授としてわれわれの仲間に加わった。氏は、他ならぬこの土器の属する縄文時代、ことに晩期の専門家である。渡りに舟とはこのことではないか。私はこの三足土器をわれわれ3人のいわば共同研究の材料としては、と考えたのである。

しかもタイミングのよいことには、翌96年5月に日本考古学協会第62回総会が早稲田大学を会場に開かれることになっている。主催校として受入れ準備や運営でそれどころではないかもしれないが、研究発表の一つとして、この事例についてとりあえず速報してみてもどうだろう。岡内、高橋両氏は、こうした私の意図をただちに了解され、協力を約された。

その年の9月には、菊池と高橋は高柳（現、小林）圭一君（現、山形県埋蔵文化財センター）とともに青森県は馬淵川流域の現地を訪れて、三足土器に伴出したとされる土器を拝見、また出土地点を沼畑正人氏にご案内いただき、さらに関係者やコレクターからお話をうかがったりもした。その結果、件の三足土器が出土した地点は、現在は民家になっているが、かつて江坂輝弥氏が調査されたこともある有名な虚空蔵遺跡の一隅であり、問題の三足土器は沼畑氏の証言どおり、偶然の機会にはあれ、疑いなく縄文晩期の複数の土器とともに出土したものであること、などが確認された。

さて、その後は専ら高橋氏が中心となり、大学院博士後期課程の中村敦子君などの協力を得て実測図作成など作業を進め、予定どおり、96年5月26日に早稲田大学を会場に開かれた日本考古学協会総会で速報するとともに、実際に土器を展示し多くの研究者に直接ご覧いただいた。これが全国の研究者たちの注目を集め、大きな反響を呼んだことは申すまでもない。

かくて、そこでの速報をもとに、いわば本報告として本誌に掲載させていただくことにした次第である。学術的重要性をよく理解されて、この貴重な資料をわれわれに委ねられた沼畑正人氏、

足立恒雄氏、それに黒洲田の三足土器につき貴重な写真を提供された七戸町の盛田稔先生など、この報告をまとめるにあたってお世話になり、あるいはご教示くださったすべての方々にここで改めて感謝申し上げます。

この希有の資料については、今後もわれわれ考古学研究室の共同作業として研究を継続していくつもりである。この三足土器は、ご覧のとおり1つの小さな壺にしかすぎないけれど、それが内包するものは極めて大きく興味は尽きない。どうか類例をはじめ、三足土器に関していかなることでもご教示をお願いしたい。

(菊池徹夫)

### 引用・参考文献

- 安志敏 1985 「長江流域先史時代文化の日本列島への影響」『考古学雑誌』第70巻第3号
- 青森県教育委員会 1978 『松元遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1978 『細越遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書 第49集
- 青森県教育委員会 1981 『右エ門次郎窪遺跡・三合山遺跡・石ノ窪遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書 第69集
- 青森県教育委員会 1985 『今津遺跡・間沢遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1995 『泉山遺跡』青森県埋蔵文化財発掘調査報告書 第181集
- 青森県埋蔵文化財センター 1989 『富ノ沢(1)・(2)遺跡』
- 梅原末治 1983 「史前の玦状耳飾に就いての所見」『日本古玉器雑攷』
- 江坂輝弥 1958 「青森県三戸郡虚空蔵貝塚」『日本考古学年報』
- 岡田康博 1986 「今津遺跡にみる亀ヶ岡式土器」『考古学ジャーナル』No. 261
- 乙益重隆 1967 「弥生時代開始の諸問題」『考古学研究』第14巻第3号
- 賀川光夫 1961 「縄文式後晩期における大陸文化の影響」『歴史教育』第9巻第3号
- 菊池徹夫・岡内三真・高橋龍三郎 1996 「青森県虚空蔵遺跡出土の土器について」『日本考古学協会第62回総会研究発表要旨』日本考古学協会
- 喜田貞吉 1927 「奥羽北部の石器時代文化における古代シナ文化の影響について」『民族』第2巻第2号
- 北上市教育委員会 1987 『九年橋遺跡第10次発掘調査報告書』
- 佐原 真 1968 「日本農耕起源論批判」『考古学ジャーナル』No. 23
- 新発田市教育委員会 1992 『館ノ内遺跡 D地点の調査』
- 清水潤三他 1959 「亀ヶ岡遺蹟」三田史学会
- 新谷武・岡田康博 1986 「青森県平館村今津遺跡出土の髑状三足土器」『青森考古学』第71巻第2号
- 澄田正一他 1970 『新編一宮市史 資料編1 縄文時代』
- 高橋龍三郎 1981 「亀ヶ岡式土器の研究」『北奥古代文化』第12号
- 高橋龍三郎 1992 「大洞C 2式土器細分のための諸課題」『先史考古学研究』第4号
- 名川町教育委員会 1981 「虚空蔵遺跡発掘調査報告書』
- 平賀町教育委員会 1979 『石郷遺跡』平賀町文化財調査報告書 第7集
- 福田友之 1991 「津軽半島今津遺跡の髑状三足土器」『青森考古学』第6号
- 盛岡市教育委員会 1990 『上平遺跡群 一上平遺跡第4次発掘調査概報一(遺構・土器)』
- 盛田稔 1964 「七戸の文化財」七戸役場
- 山内清男 1964 「縄文式土器・総論 V 文様帯系統論」『日本原始美術 1 縄文式土器』講談社
- 渡辺龍瑞 1976 「赤羽遺跡」『栃木県史 資料編・考古1』栃木県史編纂委員会